

## 審査員特別賞

### 「人間ドックが教えてくれた」

遠藤 薫さん

母が人間ドックを受けた。

某百貨店の旅行プランの一つで、母は健診というより、ちょっとしたお泊り感覚だったし、見送る私も、「行ってらっしゃい」の後に、「楽しんできてね」を付け加えるほど、気軽なものだった。

母に異常が見つかるとは思っていなかった。

五十五歳の母は、小柄な身体にはちきれんばかりの活力を詰め込んだ、元気のかたまりのような人だ。カルチャースクールの人気講師として、忙しく職場を駆け回っている。左の耳が聞こえていない点があったが、それは十年以上前からだったし、近年血圧が高いのも、年相応だろう。まさか母に限って何か見つかるはずはない。そう信じて疑わなかった。

だが、結果は想像を絶するものだった。

その日、夜遅くに帰った私を、母は普段見ないような青白い顔で出迎えた。私は人間ドックのことなどすっかり忘れていたため、尋常でない母の様子に驚いた。そして、母から出た言葉は、私にそれ以上の衝撃を与えた。

「お母さん、癌かもしれない……」

人間ドックの結果だった。脳と卵巣に、それぞれ四センチ程の腫瘍が見つかったという。

目の前が真っ白になった。聞こえてくる母の声が、どこか遠くで、ぼんやりと反響しているように感じた。悲しいとか、なんで母がという怒りといった感情さえも、湧き上がってこなかった。ただ、「母が癌」というキーワードだけが、繰り返し頭の中に響いた。

混乱した頭のまま、ひとまずいつも通り風呂に入った。上がると脱衣所で、先に風呂を済ませた母が、下着姿のまま、ドライヤーで髪を乾かしていた。私はその時、濡れた身体のまま、母の背をまじまじと見つめたことを、今でもは

っきりと覚えている。ぐさりと、胸に刺さるものがあった。母の背は、こんなにも小さく、薄かっただろうか。尻は、こんなにも垂れていただろうか。いつの間に、こんなに白髪が増えたのだろうか。母の子として生まれて二十五年、初めて、母の老いを自覚した。そしてようやく、母が死ぬかもしれないという恐怖が、現実味を帯びてきた。

母は医師の勧めに従い、すぐに精密検査を予約した。結果が出るまでのおよそ三週間、何もできない、もどかしい日々が続いた。

私は表面上、以前と変わらない生活を送っていた。会社に行き、お稽古事も続けた。友人に会えば、明るく振る舞った。それでも心の中では常に、母のことを考えた。

母の左耳が聞こえないのは、腫瘍が神経を圧迫していたからだ。それを母は日常のストレスが原因だと思い込んでいた。なぜもっと早く、検査を勧めなかったのか。役に立たない後悔ばかりが浮かんで消えていく。

時折、街中でスマホに没頭したり、喫茶店でくだらない会話をしている人々を見かけると、無性に腹が立った。もてあますような暇があるのなら、その時間を母に分けて欲しい。本気でそう思った。

そうした不安定な日々が三週間続いた後、精密検査の結果を持って帰ってきた母の顔は、予想に反して明るく、ほっとした表情を浮かべていた。検査結果はどちらの腫瘍も良性。今すぐには命の危険はないという。

なんだ……と、私は呆れと安堵がないまぜになった心地で座り込んだ。どっど疲れが押し寄せてきた。それでも、「人騒がせな」と笑い話にできたことが、素直に嬉しかった。

それから母は、薬による治療を始めた。腫瘍は良性でも、破裂の恐れがあるからだという。本当は脳腫瘍に関しては切除を勧められたのだが、神経に障害が残る恐れがあると聞き、母は薬での気長な治療を選んだのだった。

もし母が人間ドックを申し込まなければ、腫瘍はもっと悪くなっていたかもしれない。今回の一件で私たち親子は、健康を過信せず、己と向き合うことの必要性を教えられた。

そして人間ドックは、もう一つ、私に大事なことを教えてくれた。死と向き

合うことだ。この三週間、私は母の死について真剣に考えさせられた。これからも母は老い、私は成熟していく。これからは私が、母を守っていかなければならないのだと、考えを改めるきっかけになったのだ。いつまでも変わらないものなどない。それでもできるだけ長く、元気な母と一緒にいたいと思う。

そして私も、母と同じくらいの年齢になったら、人間ドックを受診しよう。健診の大切さを思い知ったこともあるが、何より、将来生まれてくる自分の子供に、悲しい思いをさせたくないからだ。

そうそう、最後に一つ、嬉しいニュースがある。最近、十年来聞こえていなかった母の左耳が、少し聞こえるようになったのだ。これも治療を始めるきっかけとなった、人間ドックのおかげである。